

(様式1)

平成 23 年度
研究助成報告書

提出日 平成 24 年 3 月 16 日

研究の種類

共同研究 (含む海外)

研究課題名

「自閉症スペクトラム障害のある児童への造形活動の実践的研究」

研究代表者及び研究分担者 (所属・職名・氏名)

安田 悟 家政学部・児童学科・教授

岡田 智 家政学部・児童学科・専任講師

研究期間 (当該年度期間に何時何処でどんな事をしたか、年間スケジュールを記入)

〈例：7月25日 共立博物館において〇〇の資料収集〉

3月～ 計画と打ち合わせ

4月7日 活動場所下見

4月26日 11:00～打ち合わせ

5月23日 18:00～活動計画打ち合わせ)、 5月24日 11:00～活動計画打ち合わせ

5月27日 パラバルーン試作実験

7月4日 活動計画書作成、立体凧試作実験

7月15日 打ち合わせ、 7月22日 打ち合わせ、 7月28日 事前準備

8月2日 本番準備 活動用具搬入

8月3日 活動本番一日目、 8月4日 活動本番二日目 終了後用具搬出、反省会

8月5日 事後整理、片付け

8月20日 美術教育学会 発表

10月12日 活動のまとめ

1月10日 学会誌「美術教育」原稿送付

2月～ 学生との振り返り、片付け

2, 3月 研究論文作成

(様式2)

<p>研究組織 [氏名, 所属, 役割分担]</p> <p>(共同研究のみ記入)</p> <p>安田悟, 家政学部児童学科, 教授 支援チーム(教員, 学生スタッフ)のマネジメント 造形活動の計画, 立案, 実行 学生スタッフへの指導</p> <p>岡田智, 家政学部児童学科, 専任講師 対象児の募集, 地域との連携 支援チームの運営補助, 造形活動の運営補助 学生スタッフへの指導</p> <p>福地弘美, 家政学研究科 大学院生 研究運営補助</p>
<p>研究発表(印刷中も含む) 雑誌及び図書</p> <p>第60回美術教育学会 学術大会(2011年度) 口頭発表「自閉症スペクトラム障害の児童への造形活動の実践Ⅲ」(発表者: 安田・岡田)</p> <p>日本美術教育学会 学会誌「美術教育」No.295への執筆 「自閉症スペクトラム障害の児童への造形活動の実践Ⅲ — 表現と集団活動を促す造形と遊びのサマースクール —」(執筆者: 安田・岡田)</p>

(様式3)

研究実績の概要

1. 問題の所在と目的

サマースクール活動を実施した背景には、自閉症スペクトラム障害（以下 ASD）を抱えた児童たちにとって通常の教育環境のなか、様々な障害特性に応じた個別対応などの必要な支援が希薄であることが挙げられる。本活動の実践は ASD の子ども達への周辺支援の一部として、その障害特性や興味・関心・個の表現と制限などを考慮しながら、グループでの共同作業への適応や楽しさ、仲間との交流や疎通など、ASD を抱えた子ども達のなかで疎遠になっていたものに対して、遊びと造形活動に絞った活動プログラムが有効であるかどうかを試みたものである。特に今年で4年目となることから、今回は、野外で自然素材や自然の中の活動を取り入れた遊びと造形の活動を展開した。

2. 「造形と遊びのサマースクール」の概要

○対象児と参加スタッフ

参加した児童は1年生から6年生の男子9名、女子4名の計13名、参加スタッフは教員2名（児童造形担当教員と発達障害臨床担当教員）と、児童学科学生8名である。学生スタッフは児童2,3名の班に対して、1,2名リーダーとして参加し、担当グループの支援を行なうことになる。また、主な全体活動のメインとしてその活動を組み立て実施することになっている。活動の際には、社会的相互交渉の弱さ、こだわりや切りかえ困難、不注意や多動性、認知能力の偏りなど障害特性に応じた配慮を織り交ぜた。

3. 第3回サマースクール活動の流れ

- 1日目 AM 「造形活動Ⅰ：「大きな布に絵をかこう」全員で一つの大きなパラバルーンに絵を描く
- 1日目 PM 「遊び活動Ⅰ：「オリエンテーリング」公園内を探索しお土産作りの素材集めを行う
- 2日目 AM 「造形活動Ⅱ：「巨大凧を作ろう・絵を描こう」グループで一つ立体凧の制作とペイントを行う
- 2日目 PM 「遊び活動Ⅱ：パラバルーンで遊ぼう」「遊び活動Ⅲ：巨大凧を飛ばそう」つくったもので遊ぶ
「造形活動Ⅲ：お土産作り」初日に集めた素材を使ってお土産を作ろう

4. 考察と今後の課題

ポスターによる視覚化や事前リハーサルにより、子どもたちは作業の工程や最終ゴールへの見通しを持つ事ができ、また、ルールや約束事の事前提示が子どもたちの適切な集団行動や協力を促した。いきなり、集団行動や協力し合うといった集団性を求めるのではなく、結果として仲間とのつながりや集団としての作品につながるようにプログラムを展開したことが、個人の満足感と集団性をも保障できた結果となった。

また、野外での活動の解放感は、多動な子どもたちにとっては、行動コントロールが難しい点があったが、思う存分走ったり遊んだりできたことも、子どもたちの満足感につながった。事後のインタビューでは、保護者から、子どもたちが楽しめたことや次年度も実施してほしいとの声が挙げられた。